

11/27 マルコの福音書 2 章 13-17 節 「闇の中に光」

山口 陽一 牧師

アドベントを迎えました。マタイの福音書にはイザヤ書を引用した以下の箇所があります。「異邦人のガリラヤ、闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る」(15 節 c~16 節)。

今日は、マルコの福音書に記された「レビの召命」の記事を、このイザヤの預言の成就として学びます。主イエスはカペナウムを「私の町」と呼び、ガリラヤにおける福音宣教の中心としました。そこでの幸いな出会いを「闇の中に光」という視点で考えてみましょう。

父アルパヨが、生まれた子どもをレビと名づけた時、息子が取税人になってほしいなどとは決して思わなかったはずですが、レビとは神に仕える部族の名前です。そんな名前を持ちながら収税所にすわっている姿は、神のかたちにしたがって造られた人が、神の御心にそむいて生きている姿そのものでした。罪人として「闇の中に住む」あるいは「死の陰の地に住む」人のところに「光」であられるキリストが来られたのです。

取税人という失われた人、罪人が「光」に出会い、闇を出て「光」と歩む幸いが「レビの召命」の記事に記されています。ここには私たちが救いに与る恵み、主の弟子として生きる栄誉が記されているのです。この出会い、従ったこと、変えられて行く生涯を、自分のこととして思い巡らしてください。そして、この信仰にならしましょう。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人おや」と説いたのは親鸞でした。なじみ深い浄土真宗の教えです。善人が極楽に往生するのなら、悪人はそれ以上に極楽に往生できるというのです。人間、少くからい善人になったとしても、そんなことを誇って高慢になるくらいなら、徹底的に罪人であれ、そして阿弥陀の慈悲にすがれというのです。浄土真宗の悪人正機説(悪人こそ悟りに近い)とキリスト教の信仰義認はよく似ています。しかし、決定的な違いは、南無阿弥陀仏と阿弥陀にすがれば極楽に行ける説明がないことです。

キリスト教において肝要なのは「信心の強さ」ではなく、からし種ほどでもいい、十字架において確かな贖いを遂げて下さったキリストへの信仰です。レビはマタイ(神の賜物)呼ばれる弟子となりますが、それは立ち上がって従う信仰に始まりました。

あなたにとって、まことの「光」を迎える幸いなアドベントでありますように。